



▶ともに初優勝の斎藤翔選手(左)と長尾梨沙選手



文部科学大臣杯

3月18～21日／稲沢グランドボウル

第59回全日本ボウリング選手権

男子

斎藤翔選手
学生個人に続き全日本も制覇

女子

長尾梨沙選手
無欲でビッグタイトル獲得

(公財)全日本ボウリング協会の2021年度を締めくくる文部科学大臣杯『第59回全日本ボウリング選手権大会』は、3月18日から21日まで、愛知・稲沢グランドボウルを会場に、男子281、女子185選手が参加して熱戦が展開された。マスターズ戦男子は、1カ月前の大学個人選手権を(同志社大学)1年生で制したばかりの斎藤翔選手が、その勢いのままに全日本の頂点に立った。女子は、並みいるナショナルチーム勢との接戦を制して、伏兵ともいえる長尾梨沙選手(福岡県)が選手権者に輝いた。団体総合は、男女とも神奈川県が制して文部科学大臣杯を獲得した。

男子は二人の斎藤対決

マスターズ戦には、6人チーム戦(6G)、3人チーム戦(6G)、2人チーム戦(6G)の個人得点による個人総合の、男子は3788で1位の塚越翔太選手(神奈川)をはじめ上位26名が進出、ゼロスタートの12Gトータルで争われた。

オイルの壁をほとんど感じられないフラットなコンディションとあって、各選手スコアメイクに苦しんだ。そんな我慢の展開のなか、男子では62歳のベテラン・梅田久徳選手(三重)が、3G目に276を叩くなど、前半をトータル1307のトップで折り返した。3回戦でも梅田選手は603と手堅くまとめていたが、630の斎藤祐太選手(神奈川)が2ピン逆転してトップを奪い、661と伸ばした斎藤翔選手がトップから9ピン差の3位に上がってきた。

その接戦から、斎藤(翔)選手が「レーンをしっかり読めて、投げたいところに投げられた。



▲ナショナルチームメンバーとして国際大会でも活躍が期待される斎藤(翔)選手「大事なところでちゃんとストライクを持ってこれるような実力をつけたい」



▲2位の斎藤(祐)選手「やり切ったとは思いますが、ようやく巡ってきたチャンスだったので嬉しい」

ゾーンに入った感じだった」と振り返ったように、10G目661を打って一気にトップを奪うと、11G目も227で、2位の斎藤(祐)選手に80ピン差、3位の梅田選手に92ピン差をつけた。最終Gも「相手が相手だったので緊張はしたけど、冷静に投げ切れた」と、175とスコアは伸び悩んだが、トータル2572で危なげなく逃げ切り、全日本王者に輝いた。

「最終ゲーム諦めてはいなかったけど、力不足でした」と振り返った斎藤(祐)選手が50ピン差の2位、梅田選手はさらに17ピン差の3位だった。

◎優勝の斎藤翔選手

2週間運転免許を取るための合宿に行っていて、その間近く



▲途中までトップに立つ健闘を見せた梅田選手「マスターズにシニアで残ったのは私一人、上出来かな」

のボウリング場で3回ぐらいしか投げられず、追い込んだ練習ができていなかったで、不安を持って臨んだ。この優勝は、正直今の自分の実力とは釣り合っていないかなと思う。

女子は3ピン差で決着

女子は、3668で個人総合1位の石本美来選手(広島)をはじめ、20名がマスターズ戦に進んだ。前半を1273で安里紗希選手(和歌山)が1位、23ピン差で石本選手、さらに10ピン差で長尾選手が続くなど、男子同様に混戦模様だった。3回戦は、安里選手が504と伸び悩み、610とまとめた長尾選手が1850でトップ、11ピン差で石本選手、そして石本選手から60ピン差で高校生の石田万音選手(兵庫)が続いていた。



▲「看護師試験があって週1でリーグ戦を投げる程度だったので、不安が大きかった」というが、ナショナルチームメンバーの2人に競り勝って優勝の長尾選手

10G目に209を打ってトップを奪った石本選手が、そのまま1位、長尾選手が5ピン差で最終Gを迎えた。その最終Gは、6フレのスプリットでオープンを作った石本選手を長尾選手がピン差逆転して9、10フレ勝負へ。左レーンはすべてストライクも右レーンを攻略できずダッチマンスタイルの長尾選



▲4年ぶり2度目の優勝はならなかった石本選手「難しいコンディションのなか、できることはやったので悔しいはないです」



▲あわや大逆転というシーンを演出した石田選手「最終ゲームの6フレ、力が入って6本カウントが悔やまれます」

手は、9フレの⑥⑩ベビースプリットを「取らないと負けなので、集中した」ときっちりカバー。このスペアがものをいう形で、長尾選手が石本選手を3ピン逆転するトータル2444で、初の選手権者に輝いた。

その二人のしれつな優勝会争いの陰で猛追してきたのは石田選手。最終Gを前にトップの石本選手とは84ピン差があったが、6フレの6本スペアが悔やまれるセミパーフェクトの276。長尾選手に3ピン及ばず、石本選手と同ピンの3位にとどまった。

◎優勝の長尾梨沙選手

マスターズに残ったのも初めてだったので、まさか優勝できるとは思っていなかった。最終

ゲームはむちゃくちゃ緊張したけど、そのなかでも集中して投げられた。看護師になれば思うようにボウリングをできないと思うので、優勝はすごくうれしい。

団体総合は神奈川が男女アベックV

各種目の合計ポイントで争われる団体総合は、男子は6人チーム戦と3人チーム戦で優勝など、32ポイントを挙げた神奈川県が3年ぶり6回目の優勝、女子も6人チーム戦と2人チーム戦の2種目を制した神奈川県が25ポイントで、実に24年ぶり2度目の優勝を飾り、男女アベックで文部科学大臣杯を獲得した。



▲選手層の厚さで男女ともに団体総合を制した神奈川県